

令和7年度 足立区総合教育会議 会議概要

会議名	令和7年度足立区総合教育会議		
事務局	政策経営部政策経営課		
開催年月日	令和7年10月14日(火)		
開催時間	午後1時12分～午後2時33分		
開催場所	足立区役所南館8階 庁議室		
出席者	区長 近藤 弥生	教育長 中村 明慶	教育委員(教育長職務代理者) 倉橋 さとみ
	教育委員 久保田 善彦	教育委員 土肥 和久	教育委員 大井 欣一
	学力向上専門監 半田 英雄	教育DXアドバイザー 稻葉 守朗	教育DXアドバイザー 田中 泰徳
	教育指導部長 田巻 正義	教育政策課長 秋元 康裕	学校ICT推進課長 加藤 鉄也
	学力定着推進課長 蜂谷 勝己	政策経営部長 岩松 朋子	政策経営課長 鈴木 孝昌
欠席者			
会議次第	別紙のとおり		
資料	• 次第 • 出席者名簿 • 座席表 • 説明資料「学校におけるICT利活用の現状及び課題」		
その他			

(審議経過)

○鈴木政策経営課長

それでは、ただいまより令和7年度足立区総合教育会議を開催いたします。

私は、本日司会を務めさせていただきます、政策経営課長の鈴木と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、本会議は公開を原則といたしております。会議記録はホームページ上で公開させていただきます。

また、会議内容を正確に記録するため録音させていただいていることもご了承いただきますようお願いいたします。

公開用として会議中の様子を事務局職員が写真撮影させていただきます。その点もご了承願います。

なお、本日の出席者につきましては、出席者名簿をお配りさせていただいているので、こちらでご確認いただきますようお願いいたします。

それでは、次第に沿って進めさせていただきます。

本日の総合教育会議は、「区立小・中学校におけるＩＣＴの利活用の現状及び課題」がテーマでございます。

近藤区長、ご挨拶はよろしいですか。

○近藤区長

本件と関係ないのですけれども、せんだって今年の決算特別委員会が終了いたしまして、かなり教育関係に対するご質問の数が多かったです。多かったのはやはり引きこもり・不登校の対策についてかなり具体的に細かく聞かれましたとのと、現在の対策で足りないところを次年度どのようにカバーしていくのかという具体的なご提案もございました。あとは居場所についてもいろいろ出ていたかと思います。

この辺の質問の内容と答弁については教育委員会でまとめていただいて、校長、学校の役員の

皆様、そしてまた教育委員の方には見ていただいて、ご意見を頂きながら、少し具体的に、割と通り一遍の回答が多く、そのところで即答できない部分もありますけれども、それを受け、次年度、改善していくところですとか新しい事業や施策を打っていく必要があるのかどうかというところも含めて、ぜひ教育委員の先生方や今日お越しの校長先生をはじめ、全ての校長先生に伺うのはなかなか難しいとは思いますけれども、その辺のところをよろしく取りまとめさせていただき、きっと決算の質疑を次年度に生かしていただきたいと思います。

もう一つは、クラブ活動の地域移行についても大きな課題だと思っております。ご承知のように新田でモデル事業を始めましたけれども、とにかくにも1クラブで800万ということですので、この形を全校展開していくというのは非常に難しいということと、学校によっては、体を動かすということを目的としているところもあれば、大会に出場するというような目標を持っているところもあって、なかなか同じ対応を全ての学校に入れ込んでいくというのは難しいこともありますし、土肥教育委員からもお話をあったとおり、先生方の中でもクラブの顧問について非常に熱意を持っている方もいらっしゃるということで、確かに負担軽減ということを進めていかなければなりませんけれども、全てのそうしたやる気のある、やってみたいという先生を排除するのもおかしいだろうということがございます。

今後どういう形で地域移行というかクラブ活動、部活について区として対応していくかということ、また、新たな方向性を次年度は探っていく必要もあると思います。ただ、これは教育委員会で頭ごなしに考えるのではなくて、現場の声を頂いてということもあります。そうしたところで、細かいことの積み重ねによって来年少しでも改善というか、現場から助かったという声が上がるよう努めていきたいと思いますので、またお

知恵を拝借したいと思います。

それについても、ぜひ頂いたご質問をカテゴリーに取りまとめて、こういった方向で考えているとか、これについてご意見を頂きたいということで、なるべく早い段階で、できれば年内のうちに先生方にご意見を頂きながら一定の方向を取りまとめて、またミーティングのときにでも報告していただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

すみません、今日の内容とは異なる内容で大変恐縮でしたけれども、取りあえずお話しさせていただきました。

どうぞよろしくお願ひいたします。

○鈴木政策経営課長

それでは、議事を進めたいと思います。

次第の3番になります。「区立小・中学校におけるICT利活用の現状等」を学校ICT推進課長より説明いただきます。よろしくお願ひいたします。

○加藤学校ICT推進課長

よろしくお願ひいたします。学校ICT推進課長の加藤でございます。

資料は資料1をよろしくお願ひいたします。

まず3ページをご覧いただきたいと思います。

こちらは区が目指す授業スタイルの様子でございます。

吹き出しの右側は「協働的な学び」の様子、友達同士でそれぞれの考えを共有したりしながら考えなどを深めてまいります。

左の吹き出しは「個別最適な学び」で、一人でインターネットを使用するなどして自分で考えながら学びを進めているという様子でございます。

真ん中の「一斉授業」については、子どもの進捗を見ながら教員が直接指導しているという様子でございます。

こちらが我々が目指す授業スタイルというイメージでございます。

4ページをお願いいたします。

それでは、区立小学校の現状でございます。

この表でございますが、我々としては左下の黒囲みから右上のオレンジの囲みを目指していきたいと考えております。横軸が個別最適な学びを測る指標、縦軸が協働的な学びを測る指標という形になっているところでございます。今2項目を達成している学校は67校中35校という現状でございます。

次をお願いします。5ページでございます。

これは中学校の現状でございます。

中学校に関しましては、35校中10校程度が2項目を達成しているという現状でございます。

このように、毎日使う学校もあれば、月1回程度の学校もあって、活用の差が大きいという状況でございます。

この差を埋めるために、教育委員会としては——1ページ飛ばして7ページをお願いいたします——要因を教員のスキル、マインド、組織・校内体制というふうに分けまして、それぞれの要因に対応する対応を取らせていただいております。

まずスキル向上のためには、当然、研修の実施に加えて、個別の困り事に対応できるICT支援員の配置などを行っております。

また、組織的な対応として、主に管理職をサポートするため、本日も出席しておりますが、DXアドバイザーを派遣し、学校を巡回して管理職をサポートしているところでございます。

また、組織対応に取り組む環境づくりとして、GIGAスクール推進校を輪番制で指定するなどして学校の組織的な対応ができるように進めているところでございます。

今後も教育委員会といたしましては学校の困り事に寄り添ったサポートを推進していきたい、またDX推進プランの目標達成に取り組んでい

きたいと考えております。

私は、概要でございますが、以上でございます。

○鈴木政策経営課長

ありがとうございます。

○近藤区長

あまりにも通り一遍だと思うのです。学校ごとの格差が特に中学校で大きいということは数年前から言われているわけで、その中でG I G Aスクール推進研究校の裾野を広げて、研究校になることで少しでも活用を進めてもらいたいというふうにかじを切ったということで、今年からということになるかと思うのですけれども、相変わらずなかなか進まないところもある中で今みたいなことを言われても、3年前と言っていることがほとんど変わらないのです。どうするということ、こういう会議ですから、もう少し突っ込んだ話ができるないとやっている意味がないですね。

○加藤学校 I C T 推進課長

すみません、言葉が足らなくて。中学校の現状につきましては、我々として、学校同士の差が大きいということで、それぞれの学校に必ず研究校になってもらうということで輪番制を取らせていただいております。そのような中で学校の中で I C T を使っていこうという風土の醸成や組織体制なんかを整理していきながら格差の解消を進めていきたいと考えております。

○近藤区長

最初に言ったことと内容は変わらないわけですよね。一番しわ寄せがくるのは子どもだと思うのです。非常に熱心に活用しているところもあれば、校長先生からして不熱心なところもあるというようなことで、小学校のときにかなりレベルの高いことをやっていて、これでまた中学に行って

頑張ろうと思った矢先に中学校でなかなか進まないというと、小学校で積み上げていったことは一体何だったのだろうというようなことにもなりかねないと思うのですけれども、その辺のところは後でじっくり伺うとして、どうしたらこれが進んでいくのかということ。決して I C T 一辺倒ということではありませんけれども、問題は格差が出ているということ、進んでいる学校とそうでない学校、同じ公立の学校でありながら子どもたちにしわ寄せがくるという状況は区として絶対に見過ごすことはできないと思っているので、その辺のところはまた後で、特に中学校は進んでいるということですから、もう少し担当にも具体的にご進言いただければと思っています。今みたいな作文ではこれからもなかなか先行きは厳しいと思うわけです。

すみません、途中で茶々を入れてしまって。

では、進めていただけますか。

○鈴木政策経営課長

続きまして、教育DXアドバイザーから、学校現場における現状をご説明いただきたいと思いますので、稻葉先生、田中先生、よろしくお願ひいたします。

○稻葉教育DXアドバイザー

教育DXアドバイザーの稻葉です。よろしくお願ひいたします。

私と田中アドバイザーは、今年度の4月より教育DXアドバイザーとして各校を回り、授業観察や管理職からの聞き取りをしてきました。本日までの延べ数ですけれども、中学校は39校、小学校は45校を訪問しました。

これまでの校長としての経験を踏まえ、足立区の小・中学校における学校 I C T の現状と課題について感じたことや考えたことを資料にまとめました。

現状及び成果をご覧ください。

初めに、ICT推進課ではこれから授業スタイルのSTAGEを1st、2nd、3rdの3段階で示していますが、今回は現状を理解していただくためにあえてSTAGE0.5を設けました。授業におけるICT活用は、教員の90%以上がSTAGE0.5の段階にあります。

STAGE0.5とは、主にデジタル教科書、Classroom、AIドリル、スライド作成等の活用を指します。

一方で、付箋機能での情報共有や思考ツールを活用するSTAGE1は30~40%、動画を活用した考察を行うSTAGE2は10~20%、そしてSTAGE3は10%未満とまだ発展途上にあります。

現状では総合的な学習の時間、社会科の授業の調べ学習で活用している傾向が多く見られます。

また、思考ツールの主な活用は学活や道徳で、動画の活用は理科や体育における考察の資料として利用されていることが多くあります。

これらの数値はあくまで私と田中アドバイザーが観察のときに見ている授業の様子や管理職へのヒアリングから受けたアドバイザーフィードバックの数値です。具体的な検証ではありませんので、よろしくお願いします。

次に、校務における活用について説明します。校務では、教職員間、学級、部活動等での連絡ツールとしての活用が定着しています。また、アンケートの収集・まとめ、来校者や提出物の管理については二次元バーコードによるデータ管理が行われています。さらに授業における評価・評定の資料としての写真や動画の活用も進んでいます。

新しい動きとしては、生成AIの有効活用が挙げられます。会議の議事録、文書作成、資料や問題作り、授業アイデア検討、アンケートの作成・分析・課題解決などに活用する学校が増えています。

また、学校サイト等の作成によるペーパーレス

化も進みつつあります。

校務におけるICT活用が進んでいる学校は、授業における活用も同様に進んでいるという状況でした。

学校ICT推進における課題について説明します。

まず課題の1つ目として、ハード面の課題について説明します。

学校現場では、端末の破損や故障により修理に出すため、代替機の端末をぎりぎりで回している状況があります。機器の維持管理が大きな負担となっています。

また、体育館に備付けのWi-Fiがないため、他の教室と同様に容易につながるWi-Fi環境を望む声が多くありました。

さらに、校務系と学習系のネットワークがシームレスでないため、校務及び学習系の端末で作成したデータ等の移動に手間がかかるという課題があります。

課題の2つ目として、ソフト面の課題について説明いたします。

生成AIを含め、ソフトウェアの進歩のスピードはとても速く、教育への活用は避けては通れません。そのために、活用に向けた方向性を早急に検討し、全教職員を対象とした環境設定を行う必要があります。

また、アプリも様々な種類があり、その進歩も速いため、対応が難しいと受け止めてしまう教員が少なくありません。

そのために、区が推奨するアプリとしてGoogleアプリやFigJamなどをある程度絞り込み、支援や実態把握がしやすい環境を整える必要があります。

さらに、AIドリルQubenaの活用は進んでいますが、効果的な活用方法については検証が必要です。

課題の3つ目として、学校間格差について説明します。

最も深刻な課題の1つがこの学校間格差です。ICTの活用や教員の活用しようとする意識については、学校及び個人により大きな差があります。

まずリーディングDX指定校は、最先端の情報が得られる全国規模の研修会に参加し、文科省の最新の情報に触れる機会があります。このような機会を得た教員は、社会の現状や今後の教育の在り方について理解を深め、意識が変容し、STAGE2やSTAGE3に向けたチャレンジを積極的に行っていきます。

また、リーディングDX校の冠がなくても、意識の高い管理職やリーダーが複数いる学校では、ICT支援員による研修会を積極的に設定するなど、ICTの活用に組織的かつ計画的に取り組んでいます。

しかし、多くの学校はSTAGE0.5程度の活用にとどまっているのが現状です。

このようにSTAGE0.5程度の活用にとどまっている原因には、教育委員会が求めるICTの活用の姿が明確に伝わっていないということが考えられます。また、壊すから、遊ぶから、トラブル対応でできないからといった理由で限定的な使用としてしまっている学校も見受けられます。

さらに、中学校では高校受験、進路を決定するということがゴールとしてあるため、それがICT活用の足かせになっていることもあると考えられます。ICT活用で学習意欲が高まるのは理解できても、入試を突破できる学力をしっかりと身につけさせたいという責任感を強く持っているため、従来の暗記型の授業が優先されてしまうという傾向はあります。

小・中学校の違いを見ると、小学校は学級担任のICT活用能力が児童のICT活用に大きく影響します。しかし、方向性が明確に示されれば、校内研や区小研などを通して活用が今以上に進んでいくと考えられます。

現状を踏まえると、小・中学校それぞれに合ったICT活用のゴール設定が必要と考えます。

○田中教育DXアドバイザー

続きまして、課題4以降は、私、田中のほうで説明させていただきますが、本日はICTの活用がテーマとなっておりますので、課題4について生成AIに分析させて音声解説を作成いたしましたので、この後はそちらをお聞きいただいて、私は画面操作に集中させていただければと思います。

○A I 1

組織風土とかいろいろな要素が複雑に絡み合っていると言えますね。

○A I 2

ここまでハード、ソフト、そして学校間の格差という課題を見てきましたけれども、資料は、これらの問題の根っこにあるもっと本質的な要因として教育委員会のスタンスを強く指摘しています。これは個々の学校とか先生の問題というよりシステム全体に関わる構造的な話に踏み込んでいます。

○A I 1

ええ、これは今回の資料の中でも特に核心をつく指摘だと思いますね。要点は大きく2つあります。

1つは、教育委員会としてICT活用を通じて子どもたちにどんな力を身につけてほしいのか、あるいはどんな授業スタイルを目指していくのかという具体的なビジョンとか方向性が現場の学校や教員に十分に伝わっていない、あるいはそもそも明確に描けていないのではないかという点。

そして、もう一つは、教育委員会がこれまで実施してきた様々な事業、例えば学力調査とか教員

向けの研修、補習授業とかが、1人1台端末というデジタル環境が整備されたこの現状に合わせて十分にアップデートされていないのではないかという点ですね。

○A I 2

つまり、教育委員会の示すべき旗印が曖昧で、かつ既存の取組が新しい時代に対応できていない、この2つが学校現場の意識改革を鈍らせて、ICT活用のレベルに大きな差が生まれちゃう根本的な原因になっているという、かなり厳しい見方ですね。

○A I 1

そのとおりです。

だからこそ、改善策としてまず求められるのは、教育委員会が、「私たちの自治体ではICTを活用してこういう力を育てて、こういう授業を実現していきます」という明確なビジョンを示すこと、そして、そのビジョンを実現するために、教育委員会内部の関連部署、指導課とか研修担当、情報システム担当とかがしっかりと連携して、既存の事業をデジタル前提で再設計・アップデートしていくこと、教育委員会自身の本気度を具体的な事業の変化として現場に示すことで学校の変革を力強く後押しする必要があると提言されています。

○A I 2

なるほど。教育委員会が変わらなければ現場も変わらないと。

その具体的な事業見通しの例も幾つか挙げられています。

まず、区学力調査のCBT化、これはコンピューターを使ったテスト形式への移行ですね。

○A I 1

はい。現在の紙ベースの学力調査は、基礎的な知識・技能の定着度を測る上では一定の役割を果

たしてきたかもしれないですけれども、これから時代に求められる思考力・判断力・表現力とか、そういう力を十分に測れているかというと、ちょっと限界があるのではないかと。むしろ点数を取るための対策に偏っちゃって、本質的な授業改善につながりにくい側面すらあるかもしれない。

そこで、テストをCBT化、つまりコンピューターベースに移行することで、「これからはこういう力が重要になりますよ」という明確なメッセージを学校現場に送って授業改善を促すという狙いがあるようです。

基礎学力の定着度チェックは、むしろA I ドリルなんかを日常的に活用して行うという考え方も示されていますね。

○A I 2

学力調査の在り方を変えることが授業を変えるきっかけになると。

ほかにも、大仙市教員派遣事業の再構築、これはほかの自治体への教員派遣研修の見直しですね。

○A I 1

ええ。この派遣事業は、過去に足立区独自の教育スタンダードを構築する上で貢献したものの、現在のICT活用推進という目標とはちょっと方向性が合わなくなってきたのではないかという指摘ですね。

そこで、例えばICT活用が進んでいる先進的な自治体への派遣に切り替えたり、研修内容自体をデジタル学習基盤を前提としたものに再構築したりする必要があるという提案です。

○A I 2

それから、中1勉強合宿におけるICT活用の見直し、これもやり方を変えるべきだと。

○A I 1

はい。一時的に集まって集中的に勉強する合宿形式というのは、短期的には効果があるかもしれないですけれども、それが継続的な学習習慣につながりにくい面もある。

そこで、集合型だけではなくて、オンラインでの個別指導とか課題配信なんかを組み合わせて、生徒が主体的に、かつ持続的に学習に取り組めるような補習スタイルへと転換していく、同時に運営に関わる教員の負担軽減にもつなげるという提案ですね。

○A I 2

さらに、指導方針の統一、これは学校を指導・助言する立場の人たちの足並みをそろえるということですね。

○A I 1

そのとおりです。教育委員会には、指導主事とか学力向上担当の指導員とか、いろいろな立場で学校を指導する職員がいますけれども、それぞれの指導内容とかアドバイスが、教育委員会として目指す授業スタイル、例えばICTを活用した個別最適化された学びとか、協働的な学びとか、そういうものと一貫性を持つように方針を統一する必要があると。

○A I 2

そして、最後に、教育委員会への提出文書の改定、学校が提出する書類の様式を変えると。

○A I 1

これは面白い視点ですね。学校が年度当初なんかに作成・提出する重要な計画文書、例えば教育課程編成の基本方針とか学校経営計画、ICT教育活用計画みたいな書類のフォーマット、様式自体をデジタル学習基盤の活用とか目指すべき授業スタイルを反映したものにアップデートするという提案なのです。

提出する書類の形を変えることで、計画を立てる段階からICT活用を前提とした教育活動を意識せざるを得なくなる、いわば書類を通じて学校の意識変革を促すという仕掛けですね。

○A I 2

学力調査、教員研修、補習の在り方、指導体制、そして提出書類の様式まで、一見するとばらばらに見えるこれらの要素が実は教育委員会というシステムの中で全部つながっていて、互いに影響し合っている。だから、部分的な改善ではなくて、システム全体として捉え直す必要があるということですね。

○A I 1

まさにそこがこの資料の最も重要なメッセージだと思います。

個々の学校とか先生の努力だけに頼るのではなくて、教育委員会といいわばOS 자체をアップデートする必要があると。

ICTという強力なツールを子どもたちの学びを豊かにするために真に生かすためには、教育委員会自身がその仕組みとか目標設定、学校への支援の在り方を根本から見直して、自らが変革のエンジンとなる、そういう覚悟が求められている。トップが変わることを示さなければ現場の本当の意味での変化は難しいのではないかという強い危機感が伝わってきますね。

○A I 2

今回の探求をまとめてみましょうか。

学校現場でのICT活用は、基本的なツールの導入は9割以上と大きく進んだものの、それを活用して授業を変えて学びの質を高めるという段階にはまだ大きな壁があると。

その背景には、端末の故障とかネットワーク環境といったハード面、多過ぎるツールやAIへの対応といったソフト面の問題に加えて、学校間の

大きな格差が存在する、そして、これらの課題の根底には、教育委員会からの明確なビジョン提示の不足とか既存の事業・システムがデジタル時代に対応し切れていないという構造的な問題があるということですね。

○A I 1

ええ、そのとおりです。教育委員会自身がまさに変革の主体となる必要性が強く示唆されていますね。

○田中教育DXアドバイザー

今、A I で説明をさせていただきましたけれども、説明のとおり、I C Tの活用における学校間の格差が現実としてあります。その原因は、それぞれの学校が抱える様々な状況や課題によるものに加えて、やはり教育委員会が示すべき目指す学力や授業スタイルが学校と共有し切れていないところが背景としてあるのではないかと考えています。

学校経営計画の重点項目の1「学力向上アクションプラン」の達成基準は、依然として区学力調査の通過率を明記することになっています。これは、「これからはI C Tを活用していくかなければいけないけれども、まずは通過率が優先だよね」というような学校の意識のずれを生む一因ともなりかねません。

また、これまで教育委員会が示してきた授業スタイルの資料は、学校I C T推進課が出した「これから授業スタイル」、また、学力定着推進課から出された「足立スタンダード虎の巻」、こういったものがそれぞれ個別に学校に示されているのが現状です。示されたそれぞれの資料の範囲の中で自分の学校の状況に合わせて無理せずに取り組んでいけばいいという、それぞれの学校の捉え方にずれが生じることにつながるのではないかと危惧しています。

足立区の目指す方向は「G I G A ×深い学び」

の実現であり、今、自分の学校、また自分自身はどの位置にいるのか、また、今日の授業はどこを目指していくのかという、教員間、また学校間、そして学校と教育委員会間でイメージを共有しながら進んでいかなければ今後もこの格差は解消できないのではないかと感じます。

以上、「G I G A ×深い学び」に向けた学校I C Tの現状と課題について説明させていただきました。

なお、先ほど音声の解説がありましたけれども、表現で若干違う部分がありますけれども、基本的には資料のほうの表現を優先させていただければと思います。

以上で教育DXアドバイザーからの説明とさせていただきます。ありがとうございました。

○鈴木政策経営課長

ありがとうございました。

それでは、次第の5「質疑応答、意見交換」に移りたいと思います。

○近藤区長

ハード面の件について何点か、来年度以降の補足をさせていただければと思っています。

故障が多いということで、故障した後のケアがなかなか大変だという話は聞いていて、これについては少し手厚く各学校に配付できるようにということで予算を組んでおりますので、担当のほうから来年度の考え方、本当にそれで十分かどうか、今ご意見を伺いたいと思います。

それともう一つは体育館のW i -F iがないという件ですけれども、これは、例えば避難所になったときにW i -F iがないと、ルーターでも持っていくのはあれですけれども、これから基本として体育館についての整備をどのように考えているのかということについても説明していただけますか。

この2点について、まずお願いします。

○加藤学校 I C T 推進課長

I C T 推進課です。

まず予備機については、現状だと 3,000 台ぐらいありますが、新しい整備では 15%を目指して約 6,000 台の予備機を準備したいと考えております。今まで、壊れたら直す、壊れたら直すという流れだったのでけれども、予備機に余裕を持たすことで、修理して上がってくるまで我々もしっかりと在庫を抱えていけるような体制をつくっていきたいと思っています。

体育館の Wi-Fi に関しては、今、区長からお話があったように、避難所で使うネットワークと我々が学習で使っているネットワークはセキュリティレベルが違うということで、今は教育専用でネットワークを引くというのはかなりのお金がかかると言われている……

○近藤区長

幾らぐらいかかるのですか。

○加藤学校 I C T 推進課長

大体 1 校 1,000 万円以上かかると言われています。

○近藤区長

1 校というのは、1 つの体育館ということですね。

○加藤学校 I C T 推進課長

そのため、使うときに、モバイルルーターという、まさしくスマホぐらいの大きさのルーターを持っていってもらって、それでつなげて使っているというのが実態でございます。

体育館というか学校にどういうネットワークを引いていくのかというのを情報システム課とも話をしていて、誰でも使えるようなものを引いていくのか、教育専用のものを引いていくのかと

いうのはこれから議論をしていく必要があるのかなとお話を聞いていて思いました。

○近藤区長

最初の故障の件ですけれども、今の課長のお話だと、6,000 台を区のほうに置いておくと。それだと学校現場は壊れたときに一々やり取りしなければならないわけですね。余分に学校に配備する数というのを年度以降どうなるのでしょうか。

○加藤学校 I C T 推進課長

今考えているのは、1 校 10 台ぐらい置ければと思っています。学校によって、壊れた、壊れていないという在庫が、今の問題は、各校たくさん在庫を持っていて、ゼロになってからご連絡いただくという形だったので、我々教育委員会のほうで在庫の余裕を持って運用していくたほうが効率がいいのかなと今のところ考えています。

○近藤区長

この故障の代替機の考え方については、何かご要望というか、今の課長のコメントでご意見はありますか。

○稲葉教育 DX アドバイザー

現場を回っての校長の言葉ですけれども、子どもに与えられなくて授業が成立しなかったということはないです。保障はされています。ただ、それがかなり修理に出すというところに行って、ぎりぎりの状態の期間がある程度あったのです。そうすると、また次に壊れたら次の手配ができないのではないかという思いが校長の中にはありました。

○近藤区長

常にね。

○稲葉教育DXアドバイザー

常にあります。

でも、子どもなので、壊す子もいれば落としてしまう子もいて、その辺のある程度の余裕、幾らでも余裕があるのでどうぞというものではないと思うのですけれども、今、課長が言われたように、ある程度の余裕があるという前提の中で、大切に扱ってくださいねというベースがあれば、そういう声は出なくなってくるのかなと思います。

○近藤区長

取りあえず来年度は少し余分に配置すると言っていますので、それで半年なり1年やっていただいて、さらにまた工夫が必要なのかどうかということは現場から声を上げていただければと思います。

体育館につきましては、お金のことは置いておいたとしても、セキュリティの度合い、一般的なものと教育回線を別々に引くということが現実的かどうか分かりませんので、私も入って、なるべく早く、検討している余裕もありませんので、方向性を出していきたいと思っています。これについては少しお時間を頂きたいと思います。

それと、校務系と学習系がシームレスではないという話ですけれども、これはシームレスになり得るのですか。

○加藤学校ICT推進課長

現状、ご指摘のとおり、シームレスではありません。これは、校務系の大切な情報を守るためにネットワークを別々にしているというのが原因です。

今後ですけれども、長い目で見たときに、今、校務と学習の統一化を、国も含めて、セキュリティも含めて検証しているところです。なので、今後ネットワークの更新があるタイミングでぜひやっていきたいとは考えています。

○近藤区長

ネットワークの更新というのは具体的にいつのお話になるのですか。

○加藤学校ICT推進課長

まだ東京都のほうの方向性も出ていないのですけれども、10年、11年ぐらいをめどに、「ツーインワン」という言い方をするのですけれども、学習系と校務系の統合をしていければと考えています。

○近藤区長

二重投資というわけにもいかないので、国や都の動きを見なければならないと思いますが、今言った10年、11年という話だとまだ少し期間があるので、それまで学校はどうですか。待てないと言われても、じゃあどうするかという話になると思いますが、何か具体的なご要望はございますか。

○田中教育DXアドバイザー

ここに挙げさせていただいたのはまさに現場の声でして、現場は結構欲張りなところがあるのですが、今はぎりぎり何とかできている状況はあると思います。来年度はまた端末も新しく変わるということですし、ネットワークは別々ですけれども、Chromebookが入ったことでデータのやりくりは以前に比べたら非常にやりやすくはなりつつあります。ですから、そこは工夫次第でもう少し行けるところまでは行けるのかなと。

あと、プリンターが変わったことで、今まではこちらの端末から印刷ができなかったものができるようになったとか、前はわざわざ職員室でデータを変えてやらないと印刷ができないようなこともありましたけれども、少しずつ改善はされているのかなと思います。

○近藤区長

分かりました。

あとは、今考えているよとか、国がこうなっている、東京都がこうなっているので区としてもいつ頃をめどに対応していくつもりですよという先行きが見えるとまた違うと思うのです。ですから、そうした声を受けて区としてどう考えているかということをここだけでなく現場にお示しできればと思います。

体育館のことについては預からせていただきたいと思います。

あとはソフトですね。

では、課題2から3にかけていろいろご指摘がございましたけれども、何か教育委員の皆様方からご質問はございますか。

○倉橋教育委員

DXアドバイザーの先生方にはこの半年間見ていただいて、私が学校訪問をしている中でも、同じような、ここをこうしたらいいのにというようなところが多いなとは感じています。

あと、大仙の派遣だったり中1合宿なんかも、確かに大仙の派遣は、個別最適だったり、そういうところの学習の中ではすごくいいことだらうと思うのですけれども、ICTを使ってというと、足立区とどれほど変わるのがというとそんなに変わっているような雰囲気もなく、それこそ使っていない先生もいらっしゃいますし、校長先生に話を聞くと、うまく使えていないんとおっしゃる校長先生もいらっしゃいましたので、そういうところで、大仙の派遣がICTに関連してそっちに力を強く持っていくのかというと、それは違うのかなと私は感じております。

ただ、生徒主体の授業という意味では確かに大仙の授業はとてもすばらしいと感じているので、今後、大仙、もしくは別の方法だとしても、先生の結束力はすごく強くなって、みんなで一緒に学んでいこう、先生同士も学んでいこうとする力は

ものすごいなと。なので虎の巻の青版と緑版ができるいるんじゃないかなと感じています。

ただ、今年はそれをちゃんと見てくださいというふうに話はしていらっしゃると思うのですけれども、それを校長先生自体がなかなか見ない、またはそれを各先生たちに見てもらっているのかどうなのかも分らないというようなことで、教育委員会でもそこら辺はもう少ししっかり力を入れて声をかけていくべきなのかなと感じました。

ただ、全てICTに向けてというようなのは、例えば保護者がどれだけ使っているかというと、実は保護者はほとんど使えていない方が多かったりして、アンケートとかを出しても回収率は紙のほうが断然いいというようなこともあったりして、まだまだタブレットだったりICTということに対して保護者も全く理解できていない方が多いのかなという、そこら辺はものすごく感じていて、宿題をやらせるといってタブレットを持って帰ったとしても、子どもがよく分からないといったときに、私も分からなから触れませんというような保護者は多いと思うのです。そういうときにどうすればいいのかということも本来だったら保護者がしっかりと考えなければいけないところなのですけれども、そこら辺はもうちょっと学校なり教育委員会が何かするべきなかなとも感じております。

すみません、長くなってしまったのですけれども、もう一点だけ。先ほど先生たちも言っていたのですけれども、指導方針の統一、これは本当に私もすごい思うのですけれども、各課のいろいろな指導員または専門員の先生方がいらっしゃるのですけれども、私でも分からなくなるぐらいいるような気がします。その方たちがそれぞれにそれぞれの立場でお話をしているとちょっと現場が混乱するのかなと感じることもあるので、そこら辺をしっかりと、答えを完全一致にはできないとは思うのですけれども、ある程度答えが一致し

ているといいのかなと感じました。

すみません、質問ではないのですけれども、今回これを読ませていただいた感想ということで、以上です。

○近藤区長

ありがとうございました。

ソフト面では特に教育委員会からきっちりとした方針が打ち出されていないのではないかというようなお話が出ましたけれども、大井先生や土肥先生、学校現場にいらしたときに今のご指摘についてはいかがかということと、じゃあこれからどのように教育委員会としてそうした活用の方向性を検討するだけではなく示していくのか。多分、担当はやっていると答えると思うのです。基本的には。そうすると、何が足りないのか、うちが出しているものと現場が求めているものに何か齟齬があるのかどうか、その辺のところについてもコメントを頂ければと思います。いかがですか。

○土肥教育委員

私が感じているのは2点あります。

1点目は、端末を活用することで児童・生徒は間違いなく参加型の授業になっているので、紙と鉛筆の授業よりも子どもたちは主体的に動いていますし、中学校に行けば、寝ている子どもたち、机に突っ伏している生徒はいなくなりました。これは間違いなく事実だと思います。要するに端末を活用することで児童が授業に積極的に関わるようになってきたというのは、いろいろな学校を見ていてすごく感じました。

もう一点は、学校間格差。学校と学校を比較するといったときに、悪いことではないのですけれども、14～15年かけて、通過率を何とか上げよう、底力をつけようと努力てきて、一定の成果は出たと思います。でも、どうしても、特に管理職ですけれども、管理職を含め教員たちは、通

過率を上げるということにかなり重きを置いているという現状があると思います。その上で、国がこれだけICTの活用ということを言っているので、どうしても教員たちは通過率にばかり目が行き過ぎている部分、学校経営計画にも通過率何%以上を目標としますと管理職は書いているのですけれども、それは否定しませんけれども、それとともに、学びに向かう姿勢、つまりICTを活用してどう授業改善をしていくかとか、子どもたちが学習が楽しくなったという数値がこれだけ上がった、そういうことも学校を評価する一つの素材としていただきないと、「通過率を上げないとまずい。ICTも使わなきゃいけない。どうすればいいんだ」といったときにどうしても通過率に流れてしまう学校は間違いなくあると思うので、教育委員会として、強いメッセージとして、ICTをこう活用していくというようなメッセージを出していただくというのは今後必要ではないかなと私は思っています。

○大井教育委員

4月から小学校や中学校を回らせていただけてまず感じたことは、この数値がでていますけれども、中学校のICTの活用は私が思っていた以上にされているなという感想があります。もちろん、教育委員会が提示しているようなSTAGEの1st・2nd・3rdのところまでは十分達していないかもしれませんけれども、各校で活用しようという意識と、今まで私が訪問した学校だけですけれども、学校長の意識は高まっている学校が多く現れてきたなと思っています。これは、教育DXアドバイザーが設置されて各校を訪問しているということと、ブロックごとにマストでGIGAスクールの研究に取り組んでいくということを推進してきたことが少しづつ成果として表れてきているのではないかと思っています。

ただ、現場、特に中学校の場合には受験で結果を出さなければいけないというマストがありま

すので、そのところをどうやってクリアするかということが、対応策②のマインドを変えていく、教員も管理職も変えていくということにつながっていくと思うのです。ですから、ICTを活用した授業改善に取り組んできたことが学力の定着にどういう影響を及ぼしたかという成果を示していかないと、使ってほしいと言うだけではこのマインドは変わらないと思うのです。マインドを持っている学校は変わるけれども、「違うだろう。やはり鉛筆と紙でやっていかなければ受験を突破することはできない」というマインドを変えることはできないので、ICTを活用した授業改善に取り組んできたその成果として学力定着がどうなったかということを示していくことが必要だと思います。

あとは、小学校では改革が随分進んでいるよう思うのですが、進んでいない学校は校長のリーダーシップというか意識が改革されていないことが要素の一つとして挙げられると思うのです。ですので、教育委員会が具体的に、この年はここら辺までやってほしいのだというようなイメージというか、足立区が目指す授業スタイルのイメージの試案がDXアドバイザーから示されましたけれども、そのような具体的なイメージを提示していただいて、今年度その学校はどの程度のところまで進んでいくのだというように学校経営計画に示していって、校長が意識を持って学校改革に取り組んでいくというマストの条件をつけさせが必要ではないかなと思っています。現在も学校経営計画の学力向上の一部にはICTの取組についてどうやっていくのだという項目はマストとしてあるのですが、これを一つ特化した形、飛び出した形で強化していくいうことが必要ではないかなと思っています。

以上です。

○久保田教育委員

私は、教育委員になる前からICT活用を見て

きたという立場からすると、各学校、底上げはきっちりできているのではないかなど。それだけではなくて、先進校は全国が注目するような先進的な活動をするようになってきておりまして、視察も多いということで、これはすばらしいことです。その学校は年々レベルを上げているのです。それによって差が生まれていることがあるのだろうと思っております。

でも、先進校だけではなくて、しっかりICT活用頻度が高いと、授業改善、さつき言った子ども中心の授業への改善もしているというようなデータが去年の全国学力テストからも出ておりますので、この調子でうまくいってほしいなというところなのですが、それでは全然改善にならないので、どうやって底上げするかというところなわけですけれども、ここに授業スタイルのイメージ試案というのが出ていたりしますが、これを自分の目の前の授業に落とすまでのイメージができるでないのではないか。こういうことをやらなければいけないのは先生たちも重々承知しているのです。先生たちはばかではありませんから、相当こんなことを改革しなければいけない、自分の授業をどう変えなければいけないというのはよく分かっているのですが、細かいところで自分の目の前の子どもたちに落とすイメージが持てないのかなと思っています。今までではリーディングDXということで先進的な学校の授業公開があったわけで、それはすばらしいことなのですが、それでは少し差があり過ぎてイメージが届かない先生たちもいるのではないかなど。だから、そこをつなぐ手立てをきっちり考えてあげないと、その下側の先生たちが上に上がるということはなかなか難しいのかなと思いました。

もうちょっとだけいいですか。校務支援についてなのですが、たしか都が共同調達をするというような話を出しておりますので、それは校務支援システムなのですが、それがどうなるのかによって、先ほどのネットワークを切り離す・離さない

というところは一緒に考えなければいけないところなのであろうと思われますが、都がすぐに動いてくれるかどうかは分からないです。

先ほど生成A I のしゃべりがあったのですが、生成A I をもう少し学校に取り入れてもいいのではないかというのが私の意見です。この間〇E CDから国際調査が出たのですが、そこでは、日本は先生たちの働き方改革がまだ足りないというだけではなくて、生成A I の活用もいま一つであると。これは公務についてと授業についてと両方あると思うのですが、この辺を各学校でもしっかり捉えていかなければいけないのではないかなど。ただし、生成A I はいいことばかりではないです。先ほどの話を聞いていて、ちょっとずれているところもありました。そうなると、その点も踏まえて、プラスとマイナスをきっちり踏まえた指導パッケージをリーディングDXでつくれてもらって、それを周りに広めていくようなことが必要なのではないかと私は思いました。

以上です。

〇近藤区長

次に、半田専門監に伺いたいと思いますが、課題4、教育委員会のスタンスとして大分厳しいお話が出ているわけです。これをそれぞれ抜本的に変えていくとなると足立の教育の大きな転換になってくるかと思いますが、いろいろご提案があった中でどのように受け止めていらっしゃいますか。できることと時間をかけてじっくり検討していかないとならないことがあるのかなという印象を私は持ったわけですけれども、いかがでしょうか。

〇半田学力向上専門監

2人のアドバイザーの先生方の見方というのはある面で正しいと思うのですが、教育委員会だけではなくて、学校現場の課題とか学校の課題とかそれもあると思うのですけれども、教育委員

会としてできること、前回の総合会議でもお話をさせていただきましたけれども、3課に分かれているという足立区の特別なそれに限ったところでの役割を担っているのですが、もう少し3課が連携して、それぞれ同じ土俵で同じ方向を向いていけばいいのかなと思っております。指導課、学力定着推進課、ICT推進課の3課がもう少し連携して同じほうにアナウンスしないと、今のアナウンスも学校現場にはそれぞれから出ているものがありますので、そこを共通してやっていく。いわゆる縦割りになっているというところがあるかと思います。

それから、特に私は、現場感覚を持った指導主事、有能な指導主事が大勢いますが、それが、特に指導課の場合には残念ながらいろいろな学校対応とか苦情対応に忙殺されてしまっている。彼ら専門家に、教育委員会の狙いを持ったメッセージを届けるメッセージャーとしても頑張っていただきたいと。

その3課の連携と指導主事の頑張りがこれから必要になってくるのではないかと感じました。

〇近藤区長

ちなみに、他区ではどういう課の体制になっているのですか。

〇半田学力向上専門監

学力定着推進課という課はございません。ですから指導課が一手にそこをやっているわけで、本区においても学力をということで学力定着推進課ができましたし、ICT推進課もその導入に合わせてできた課だと伺っております。

〇近藤区長

大仙市への派遣などはどうお考えですか。

〇半田学力向上専門監

倉橋委員と全く同じ考え方を持っております。今はＩＣＴの推進ということでスピード感を持ってやらなくてはいけないのですけれども、ＩＣＴが先進だから大仙市に行っているわけではないという土壤がもともとあるかと思います。昨年度は、秋田県で唯一の中学校、文科省からのＤＸ、仙北中学校に行かせていただいて、ＩＣＴの導入ということでもすごく勉強になりましたけれども、令和5年と本年度はそういうことではなかつたと思っています。

でも、先ほど倉橋委員がおっしゃったように、授業の安心感、子どもたちの学びに向かう力というのは本当にすばらしいものがあります。そこから学ぶべき点が多い。それから、国の調査を見てみると秋田県と東京都は算数ではほぼ同じ数値を出しているのですけれども、秋田県は低位層がいないのです。足立区の場合だとD層がかなりのパーセンテージを占めているのですが、下位層が少ないといったところ、それから授業への安心感に基づく授業ということを考えると、やはり学ぶべき点が多くて、大仙へ行く意義は今もすごくあると思っております。

○近藤区長

ありがとうございます。

いろいろご意見が出ておりますけれども、今のお話を伺って、お二人のアドバイザーに伺いたいのですけれども、いろいろ教育委員会のスタンスについてお話があったわけです。これはどうしても優先的に取り組んだほうがいいんじゃないかな、これはスピード感が大事ですよねというようなことも含めて、いろいろご披瀝は頂きましたけれども、まず何から手をつけていかなければならぬのか、今一番現場で困っていることはこういうことなのでこういうところのメッセージだけは早く出してほしいというようなことがあれば、もう一度伺ってよろしいでしょうか。どちらでも結構です。お二人それぞれお願いできればと思いま

す。

○稻葉教育ＤＸアドバイザー

では、稻葉の考え方を述べさせていただきます。実際に私たちは抜き打ちで行かないで、きちんと日時を決めて、その時間に見に行きますので、ある程度学校のほうでは準備をしているのかなと、授業の様子とかでは伺えます。校長の中にも、非常にへりくだって、「いや、全然使えていないんです」と言いながらも、実際に教室を回るとすごく使っている学校もあるのです。また、学校の研究の1年間の積み上げはこんなにしていきますよという冊子を作っている学校で、実際に教室でも同じことが行われている学校もあります。いわゆるビジョンを校長が示しているという学校、教育課程に位置づけているという学校、へりくだっているけれどもやっているという学校があります。

ただ、現実、例えば定期考査、期末とか中間テストがあるのですけれども、その前後に行く機会もありまして、やはり中間・期末のテストの内容は都立に即しているのです。だから、「覚えておけよ。都立に出るぞ。大事だぞ」という授業展開なので、タブレットで思考判断とか個別最適だとか、個別にはなるかもしれませんけれども、そういうものがあるということ。

ですので、教科においては、単元であったり場面であったり、特に後半のところのまとめのスライドを作ってプレゼンをするというような取組はどの学校もやろうとしているし、やっている現状はあります。

先ほどのどういう発信をすればということなのですけれども、いろいろな話を校長さん方としていて、ここは私の確信なのですけれども、私が校長をやっていたので知り合いという関係性もあるかもしれません。じゃあ本音トークいきますよという話になったときに、区の求めているものは通過率でしょう、正答率でしょうということ

なのです。文科省のトップでやられている方たち、課長さんも含めて、平均って何ですか、何の意味があるんですか、大事なのは個別ですよという話をされているのを聞いていながら、やはり学校ごとに率というものを重視している今までの、でも成果は上げてきたのですけれども、その辺の校長さん方の何を区から求められているかというところのものがしみついている。その辺がなかなか、ＩＣＴを使って子どもたちが主体的に学ぶやり方はしたいけれども、現実は押させておかなければいけない、また進路というのもあるのですけれども、その辺があるということを前提に置いて、区教委から統一した方針が示されると、できるだけ使ってくださいとか、できる範囲で使ってくださいと言われたら、やはり学校は動かないと思います。

でも、校長さんは、将来の子どもたちに向けてどんな力、資質・能力を高めたらいいのか、高めなければいけないのかということは重々承知しているというのは伝わってきています。

○田中教育DXアドバイザー

先ほどからＩＣＴの活用が進んでいるとか格差があるという話が話題になっているのですが、要はこのアの部分で活用していると思っている学校が非常に多いわけです。活用といつても結局人によってイメージが違っていて、いわゆるリーディングDX校などの学校、いろいろ先進的な話を聞いている人たちは、ここを目指そうというふうに意識が変わるので。ところが、そういう話から遠い学校、先生方というのは、デジタル教科書も映しているし、子どももタブレットを触っているし、活用していますという方もいれば、使ってはいるけど、まだまだ内容的には質はそんなに高くないですという学校もあるわけです。まずそういう意識のズれをなくすというのですか、活用というのはどの程度のことをイメージしているのかというのが明確ではないと思うのです。片や

この端っこ、一番右上を目指している学校もあれば、対極の学校もあるということで。だから、今アであれば、次はイ、ウ、エあたりを目指しませんか、目指しましょうよ、目指すべきですよ、上のこの黄色いところにいるのだったら、カとかオとかキを目指しませんかという指導を教育委員会なり我々がしていかなければいけないのだろうと。

これが、行く人間や行く立場によって、ＩＣＴだから、ＩＣＴの縦の内容だけを追っていけば、使えばいいだけでしょうという使い方の問題ですよ。

一方、横軸でいくと、授業の組み立ての問題ですね。教員が全部内容を決めて目標から活動から全て決めてやる今までの一斉授業から、子ども自身が全部決めてやるという、ここまで振れ幅があるわけです。

「GIGA×深い学び」というのは、ただＩＣＴを使いましょうではなくて、深い学びをするためにはＩＣＴを使わないと効率が悪いし道のりが遠いですよというだけの話であって、使わなくてもできるのであれば全然それは構わないと思うのです。今までそうやってきてる学校はたくさんありましたし。ただ、これが入った以上、これを使ったほうが絶対に得だよね、簡単だよね、いろいろメリットがあるよねというところで、それを使った深い学びを今こそやっていきましょうよ。昔から深い学び自体は言われていることであって、でもなかなかうまくできなかつたというのが実態なわけで、ここまで行かないにしても、この間の子どもに学びのハンドル、自分の学びだという学習をさせるのがこれから教育であり、日本の社会を担っていく子どもたちにつけなければいけない力だと思うわけです。

ですから、まずこの構造自体を私たち教育委員会がしっかりと各課で共有して、ここを目指しましょうよ、ステップを踏んで一個一個いろいろな学校を上に上に上げていきましょうよというイ

メージを持たないと。我々はICT課だからICTのことだけやっていればいい、学力定着推進課は授業の組み立てだけやっていればいいではなくて、これからは両方がクロスしていかないと駄目なのだろうなと。これを基に学校にも指導をしていくということです。

こちらのほうで課題として教育委員会のスタッフでこういうものは変えたほうがいいと言いましたが、これはあくまで例であって、学校に対して、教育委員会はやる気なんだ、変わらなきやいけないんだというのを伝えるためには、やはり見える形で授業が変わることが必要なのだと私は思っています。その一丁目一番地は学力調査だと思います。今まででは通過率をひたすら追い求めてきたことも確かだし、これが成果として上がっているのも確かです。基礎学力を上げるという意味ではとても効果があったし、みんな分かりやすく取り組んできましたけれども、逆に言えば、それさえやればいいんでしょうと。点数を上げるノウハウはどんどん蓄積されていくので、そこだけうまくやれば、点を取って通過率として数字で出れば、取りあえずあとはいいよねというような感じになってしまふ。ここがもし変わったら、もう通過率ではないんだという学校へのメッセージにはなると思います。

○近藤区長

田中先生がおっしゃるところは通過率に代えて何だということですか。

○田中教育DXアドバイザー

授業の中での子どもたちの姿が一番だと私は思っているのです。それが数字的に何で表せるかというのは多分そんなに簡単には出てこないと思いますけれども、子どもたちが学習に対して主体的に取り組むことによって少なくとも自分で考える力は伸びるはずなので、今までやってきた国の学力調査の問題の中でできていなかったも

のができるようになってくるというのは、簡単ではないですけれども、いずれ出てくると思うのです。それに代わって測るものは何だと言われると、正直、今はないと私は思います。エビデンスにできるものがどこにもないので。

○近藤区長

ただ、これだけの大きなところですから、何か共通の目的、これを変えるというのだったら何かないとですよね。

○田中教育DXアドバイザー

ただ、今まで測ってきたようなものを測るなという話ではなくて、それに代わるものとしては、例えばAIドリルも、多分、業者さんに少し上乗せすれば、いろいろな定着度をチェックするようなテストみたいなものも作れると思うのです。共通のものが。

ただ、区の調査として、全校同じ問題でどこまで通過したかを見るというよりも、その子にどの程度定着しているかを一人一人追っていくというほうにシフトしていかないと、授業の部分とテストの部分のバランスが合わなくなってくるというか、平均での通過率を幾ら言っても、一人一人の子どもは違うので、やはり下の子は下の子で救わなければいけない。その救い方は、ここで言う中1合宿であったり、はばたき塾であったり、いろいろなものがあるとは思うのですけれども、もう少し一人一人を見ていくシステムにしているなければいけないのかなと。すみません、私もここは考えがまとまっているのですけれども、そんな気がしています。

○大井教育委員

すみません、私は通過率とか正答率ということに関しては必要だと思っています。学校経営計画の一番にそのことを書いて、校長がそのことを意識させていって、それによって学校をどうやつ

て運営するのだということをやる必要はないと思うのですが、ただ、子どもの学力の現状、下の学年のところからどういう現状だということを捉えていって、それに必要な手立てを打つ手段としては、今のところ学力テストしかないとと思うので、今後も、通過率と正答率を学校経営計画に位置づけることは別として、そのことをデータ化していって、足立の全ての子どもたちに基礎学力を定着させ、そして個別最適であり協働的な学びにつなげる基礎を培っていく一つのスキルとして学力テストは必要だと思います。結局、最終的には、個別最適で、協働的で、そして深い学びをさせるためには、それだけではなくて、やはり I C T の活用を推進していくことはもちろん絶対的に必要なことで、そのことを進めていくことは必要だと思いますけれども、通過率と正答率によって I C T を推進することができないということはないと僕は思っています。

○近藤区長

田巻部長、いかがでしょうか、今までのお話を受けて。

それと 3 課の連携云々というお話が出たわけで、これは重く受け止める必要があると思うのです。

○田巻教育指導部長

連携は間違いなくやらなければいけないので。

○近藤区長

口で言うと連携って簡単そうなのですけれども、メッセージもそれぞれの課から出ているというようなことがありますから、具体的に連携して大分変わったなという、3 課の現場に対する情報発信だけでも変更ができるのかなと思ったりするのですけれども、何かその工夫。

今、総体的に 2 つのことをお願いしていて、全体的なコメントを受けて教育委員会としてどう

考えるかということと、3 課の連携ということについて、いかがですか。

○田巻教育指導部長

まず、これまでの考え方は、I C T をあくまでツールとして使うということなので、使える場面でうまく使う、そのときには足立スタンダードの中にいろいろ位置づけながらやっていきましょうということでやってきました。

○近藤区長

ツールというのは何のためのツールということですか。

○田巻教育指導部長

学習のためのツールです。紙、デジタル。

○近藤区長

学習の先の目標は何ですかという話になつているわけで。

○田巻教育指導部長

文科省は「資質・能力」という言い方をしています。今、指導要領の中では「学力」という言い方はしなくて、「資質・能力」なのですけれども、そうはいっても、全国学力調査で学力を測っている事実は変わりありませんので、その中でデジタル化が進むからといって教育の中身が大きく変わることは、今までのところではなかった。ただし、5 年後の学習指導要領の改訂に向けては、情報活用能力ですとか探求的な学びというのを重視していくのだろうという動きは見えます。ただ、大きなところは今のところはないということで、今やっていることでは、I C T 課と学力定着推進課で連携しながら、どういう場面で効果的な活用があり得るのかという事例を集めています。それを体系化して今後示していきたいとは思っておりますけれども、ではそれを示すことで本当

に使ってくれるかというのがクエスチョンの部分は正直あります。特に、小学校であれば研究に前のめりな文化があるので、いろいろなものを共有しながらやっていこうという期待は持てるのですけれども、中学校は、これまでも受験がゴールという話があるのですけれども、それをやることでどういう力が本当に身について、それが入試にも直結するのかというところの確信が持てないと、大きくかじを切るのは非常に難しいだろうと思っています。

そういう意味では、リーディングDXスクール、去年、中学校は新規に2校にやっていただきて、その校内では一気に取り組む土壤ができましたが、その学校でさえ、学力的にどう直結するかというところまではまだ実証ができていません。なので、推進校の中で1つでも2つでもそういう事例を発信していくことができないと、なかなかこれから厳しいと思っていて、ぜひ3年目の学校はそういう要素を盛り込んでいく必要があるなと。でないと、見てもらっても、参考になるなで終わってしまうので、カードを切るような仕掛けになっていかないといけないと思っています。そこが今年度の推進校の大きな役割かなと思っています

○近藤区長

いわゆる学力テストの学力と協働的で深い学び、その関係というのは今日の話でも結論が出ないというわけですけれども、協働的深い学びができる子が押しなべて全員学力的に優れているというわけではないのではないかと思うのです。どうなのでしょう。

今まで区として学力にこだわってきたのは、貧困の連鎖を断つ、自分たちで経済的に自立することができるということに重きを置いてきた関係で、確かに協働的深い学びも大事なのですが、彼ら深い学びができるても、それでご飯を食べていかれるかということがちょっと心配な部分も、すみ

ません、教育現場の門外漢としてはあります、その辺のバランスというのでしょうか、放っておいてもどんどん行かれる子とさっき言ったD群といった子どもたちに対する対応はおのずと異なってくると思うのですが、田巻さん、どうぞ。

○田巻教育指導部長

こういった話を聞いたことがあるのですけれども、今まで学習に全くついていけなくてクラスメイトの背中も見えなかつた、ただ、タブレットを使うことで背中が見えたというような。

○近藤区長

さっきの寝ている子が少なくなったという土肥先生の。

○田巻教育指導部長

はい。それぞれの子どもたちが何に取り組んでいるか、そこで見るので、背中が見えたというような事例があるような話は聞いたことがあります。

○田中教育DXアドバイザー

恐らく先ほどの「資質・能力」という言い方に変わったのだというのがまさにそこだと思うのです。いわゆるテストの点数がすぐに取れるようにはならなくても、こういったものを使うことによって学びに向かおうとする意欲が高まってきているのは間違いない。その姿勢が育つていけばおのずと今まで求めていたような学力もついてくるであろうと。要は学習に向かう時間ややる気が高まるわけなのでという長い話になってしまふと思うのです。資質・能力ということなので。ただ、今までどちらかというと目の前のテストの点数を取らせるような指導が主であったので、終わってしまうとまた元に戻ってしまうような子どももたくさんいたわけです。その元に戻ったのをまた1年後に引き上げる。そういう作業を意

外と繰り返してきたところもあったりするので、そういう意味では、畑を耕して土台の部分を少しずつ高めていくというのが多分これから求められるような授業の在り方であり、学びなのだなとは思っています。

○倉橋教育委員

先ほど貧困の連鎖というような話もあって、確かに学力はすごい大事だと思うのですけれども、今の学びは自己肯定感をものすごく感じられる授業だなと私は見ていてすごく感じます。学力だと、それこそ自分がC層とかD層とかでできないとなると確実にできない自分でしかないので、授業も面白くないし、分からないうから寝てしまう。だけれども、今の授業は、分からなくて大丈夫、分からなことを分からなと言えるし、お友達同士なので、「分からなからどうすればいい?」、「分からなかつたら聞いて」、分かる子は教えてあげられるというような、本当に底上げがものすごくできる授業だなと。そういう意味では、これから先、企業自体も、確かに勉強もそうですけれども、協働して仕事をこなせるような人材を欲しがっている今の企業ですから、これはとても大事なことだと感じております。

以上です。

○久保田教育委員

私、大学にいる立場としては、今は単純な点数だけで大学に入学させないので。AOであったり、様々な方法で、子どもたちの持っている力、点数だけではない力も把握しようとしている今の世の中なので、点数だけにこだわる必要はない。でも、点数にもこだわる必要がある。多分、両方とも両立できるのではないかと私は思っておりますというのが1点です。

2点目は、先ほど寝ないで起き上がって一生懸命やっている子がいるという、それが一番重要な気がしています。大学入試が終わったら、高校入

試が終わったら、勉強をやめちゃうわけではないのです。その先、大人になってもずっと勉強して学び続けなければいけない世の中なので、学ぶことは楽しいと思ってくれる、これが非常に重要な原動力というか、多分、貧困の連鎖を断ち切る原動力になるのではないかと私は思います。

○近藤区長

教育長、最後に何かありますか。

○中村教育長

いろいろなご意見を頂きながら、私も、全体的に教育委員会が取り組んでいることはそれぞれ課題があつてやつてきましたことだということはすごく認識しています。

学力も、基礎的な学力についてはこれからもとても大事なことだと思うのですけれども、今やっているICTを推進するというのは、学力をつける、言ってみれば知識を身につけるための土台の資質・能力の育成にすごく役に立つので、本当の順番から言うと、ICTを使って子どもたち全員にやる気が起きて、難しい暗記のものでも何でも取り組んで、今後も将来に向けて学力をつけていくというのが流れとしては理想的なのだろうと思います。

それについてもどちらかというと学校任せになつてるので、学ぶタイミングといいますか、試験前に協働的な学びをやってもなかなか現実的じやないよねという意見もあると思うので、カリキュラムの中でどういうタイミングでやるかということは、やはりそれは学校が考えることなので、教育委員会ではあまりメッセージを発信してこなかつたと思うのですけれども、あれもやれ、これもやれ、いろいろ変化が激しい中では、教育委員会ももうちょっと学校長なり担任の方にメッセージを発信するように今は段階がこれまでとは違つて、時代が変わってきたのだなと今回いろいろ聞いて思いましたので、まず教育委員会の

中で3課も含めて検討していき、形をつくっていきたいと強く感じたところです。

以上です。

○近藤区長

もう時間になりましたので、出る結論ではないのですけれども、こういう闊達な意見交換が取りあえず今日はできたということでおしとしたいところだと思いますけれども、私の個人的な考え方を申し上げると、こういう議論になったというのは、一定程度足立区の学力が底上げできたから

この今このこういう議論で、当時のことだったら、

「そんなこと言ってる場合じゃないだろう。今この状態を何とかしなきゃならないんだ」と、そういうことを経て今があるわけで、それは、それぞれの学校を支えていただいた先生なり教育委員会の皆さん方の頑張りでここまで来た。だからこそ、じゃあ次はどうしていくかという岐路に立っているところだと思います。これだけやっておけばいいのだということではないと思うので、いろいろこれからも議論を闘わせながら、少しでもいい方向に、そしてできることから一つずつやっていきたいと思っております。

今、3課の話が出ましたけれども、一つ思い出しました。今回、決算委員会で、最後に自民党の先生から、教育委員会は非常に課が多くて、学校現場から問合せをしようと思ったときにどの課に問い合わせたらいいか分からぬのでもう少し整理してくれという話がありました。課の整理は置いておいたとしても、それぞれの問合せ先の内容、学校にはきっと出ているのだろうと思うのですけれども、こういうお話が出ましたので、もう一度、電話番号も含めたり、課の役割も学校現場にお伝えしなければいけないのかなと、ああいう場で出ましたので、工夫もよろしくお願いしたいと思います。

○鈴木政策経営課長

皆様、ありがとうございました。

それでは、以上で令和7年度総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。

○近藤区長

私もずっとやってきましたけれども、今日は非常に中身があり、ようやくそういう教育会議になってきたなということで、よかったですと思います。でも、言いつ放しで終わってしまっては困るので、区としてもできることからやっていきたいと思います。

ありがとうございました。